

平成三十年度 入学試験問題

国語

第三回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから六ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

一面に続いて印刷されているのはテレビ欄です。裏を返してみると、テレビ欄の裏は事件・事故などを報じる社会面、そして一面の裏には、解説記事などを掲載する二面になっています。

どうしてそうなっているのか。新聞を印刷する回転機を、効率よく動かすためです。まず、暮らしや文化など、時々刻々の動きに左右されない特集面を、あらかじめ印刷しておきます。それから、国際、経済ニュースやスポーツの記事など、速報性の高い面を印刷し、最後に一面と社会面に最新のニュースを突っ込み、その「包装紙」で自身の「アンコ」をくるむのです。

一面はともかく、⁽²⁾ではなぜ、テレビ欄が最後に印刷されるのか。それには理由があります。新聞の締め切り直前に、どこかで大きな地震があったとしましょう。もちろん、社会部のヤキンの記者が総がかりで、現地やキショウ庁、⁽⁷⁾ケイサツ、消防に取材し、わかった範囲で記事を書きます。

もう一つ、⁽⁷⁾大忙しになる部署があります。ラジオ・テレビ欄を担当する「ラテ班」の記者です。大きな事件事故があると、テレビ局やラジオ局は翌日の番組編成を組み換え、特集番組に切り替えます。それを告知するため、最新の番組編成に記事を差し替えねばならないからです。

A 新聞は、前のほうから一〜四面、後ろのほうから一〜四面に最新の記事を掲載し、そのニュースの「包装紙」で、特集や読み物など「アンコ」の記事をくるんでいます。

実は、週刊誌など雑誌のつくりも、これと同じです。多くの雑誌は、最初と最後にカラーのグラビア、それに続く前後に白黒のグラビアを印刷し、さらに最新の記事を載せ、こうした「包装紙」で、⁽⁸⁾B 印刷しておいた連載やコラム、読み物記事という「アンコ」をくるみます。

新聞の読み方は人さまざまです。ただ私が聞いた人の多くは、忙しいときには一、二、三面にぎっと目を通し、次に後ろのほうから第一社会面、第二社会面をめぐって見出しを読むようです。そして、時間ができた時に、⁽⁹⁾C 中の特集面を読む、といえます。たぶん、最初と最後に最新のニュースを盛り込むという新聞の作られ方を、無意識のうちに感じとっているのでしょう。

ロンドンに駐在していた二〇〇五年当時、英語の新聞に掲載されたある

記事を読んで、目を疑ってしまいました。

世界の新聞発行部数のランキング十位のなかに、日本の新聞がなんと五紙まで名を連ねていたのです。ちなみに、一位読売、二位朝日、四位毎日、六位日本経済新聞、九位中日新聞という順番です。

イギリスの名だたる新聞でも、最高で百万部しかなく、多くの新聞は五十万部を切ります。数百万単位の新聞が五紙もあるという国は、ほかにありません。

そのランキングを見て、考え込んでしまいました。なぜ日本人は、これほど新聞が好きなのか？

私が考えた結論は三つあります。一つは、成り立ちの違いです。

D 英国の新聞のはじまりは、政党的パンフレットや機関紙でした。最初は新聞に税金をかけていたので、貴族や金持ちなど豊かな支配層しか買えませんでした。対抗して地下で出回った労働者向けの新聞が、その後、ゴシップなどを掲載する商業紙として刊行されるようになったのです。こうした歴史をもっているのが、今でも「高級紙」と呼ばれる一般の新聞と、娯楽中心の商業紙とは、読者層が違います。

これに対して日本の新聞のはじまりは、江戸時代に盛んだった「瓦版」です。売子⁽¹⁰⁾がガイトウで記事を読み上げながら売り歩く木版です。庶民が相手ですから、天変地異や事件・事故、ゴシップなどが中心でした。明治になって、その流れを汲む「小新聞」と、主義主張を論じる「大新聞」が合体してできたのが、いまの日本の新聞の原型です。もともと読者層が広く、どんな階層・職業の人も同じ新聞を読むという習慣ができたのです。

⁽¹¹⁾もうひとつは、「教育」です。開国を迫られて江戸幕府を倒した明治政府は、欧米に追いつくために、近代化を急ぎました。「富国強兵」で近代的な軍備を整え、「殖産興業」で産業化や機械化を進めました。そのため、教育や文化に使うお金は、後回しにされてしまいました。

その受け皿の一つになったのが、新聞でした。江戸時代まで、多くの書籍は漢文で書かれ、難しい文献⁽¹²⁾を読みこなせるのは、武士階級や僧侶ら、限られた人々だけでした。庶民もテラコヤなどで「読み書きソロバン」を学び、当時から世界でも有数の識字率を誇っていたのですが、それでも、まだ限界がありました。

「近代国家」になるためには、「国民」が、共通の言葉を読み書きできることが前提になります。明治に入ってから、それまで書き言葉に使われていた古典的な文語体を、話し言葉（口語体）に近づける動きが盛んになりました。これを「言文一致運動」と呼びます。文章が少しずつ整理され、「漢字カナ交じり文」という今に近い文体が生まれました。私たちが夏目漱石などの小説を読めるのも、明治の作家たちが、近代的な文体をつくりあげたからなのです。

その新しい文体を広げるのに、大きな役割をはたしたのが、新聞でした。新聞は、漢字に「ルビ」と呼ばれるフリガナをつけていました。ひらがなさえ読めれば、記事をすらすらと読み、同時に漢字を覚えることができたのです。

もう一つ、⁽⁴⁾日本の新聞が手がけたものに、文化活動があります。

漱石は一九〇七年（明治四十年）に東京帝大講師から、朝日新聞に入社し、「虞美人草」や「それから」「門」などの小説を新聞に連載しました。その一方で、二年後には新聞に常設の文芸欄を設け、その編集者になって、美術評や音楽評、随筆などを載せました。他紙も競って文化にまつわる記事を多く載せ、新聞が文化活動の舞台を提供するという風土が、このころに根づきました。

大正になると、新聞社が講演会や展覧会、音楽会などを催し、おおぜいの客を集めるようになりました。戦後もこの伝統が引き継がれ、新聞社やテレビ局は競って美術展やコンサートを主催してきました。

一九八〇年代、絵画の取材で欧米を訪れたときに、「日本では、デパートや美術館で、新聞やテレビ局が美術展を催すのがふつうです」と話すと、美術館の関係者や専門家は、目を丸くしました。王室や貴族が美術品を集め、近代に入ってから、それを引き継いだ公立の美術館が展覧会を主催する欧米では、考えられないことだったのです。

教育や文化にお金を使うゆとりがなかったという事情が、マスコミがその役割を補うという日本に特有の現象を生んだのでした。

（外岡秀俊『発信力の育てかた』

ジャーナリストが教える「伝える」レッスン）

65

問一 — (1) 「アンコ」とありますが、これはどのようなものをたとえていますか。解答らんに行以内で答えなさい。

問二 — (2) 「ではなぜ、テレビ欄が最後に印刷されるのか。」とありますが、どうしてテレビ欄が最後に印刷されるのですか。解答らんに行以内で答えなさい。

問三 — (3) 「もうひとつは、『教育』です。」とありますが、新聞が果たした教育の役割とはどのような役割ですか。解答らんに行以内で答えなさい。

問四 — (4) 「日本の新聞が手がけたものに、文化活動があります。」とありますが、次のア～エの中で、日本の新聞が手がけたものではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 随筆の掲載 イ コンサートの主催
ウ 講演会の開催 エ 欧米の王族の紹介

問五 この文章は二つに分けることができます。後半の最初の五字を抜き出しなさい。（読点やかっこなどがあれば字数に入ります。）

問六

A	D
---	---

 に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

- ア あらかじめ イ こうやって
ウ たとえば エ じつくり

問七 — (ア) (オ) のカタカナを漢字に書き直しなさい。

65

65

65

65

65

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、「アンコ」と「包装紙」といったたとえを使って、新聞の

紙面の印刷の順番と構成の関係を説明している。

イ 筆者は、新聞と週刊誌の作り方の違いを示すことで、新聞が最新のニュースを伝えるのに適していることを説明している。

ウ 筆者によれば、日本の新聞の発行部数が多いのは、明治時代から貧しい人々に小説や音楽などを提供する活動をしてきたからである。

エ 筆者によれば、日本の新聞の発行部数が多いのは、外国にくらべて廉価で、子どものころから新聞を読む習慣があるからである。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「オケラが逃げた！」

声のした方に振り向いてみると、みな床にしゃがんで逃げたオケラを捜していた。

えー、誰のおー？ どっち？ どこいったと？ えー踏んじゃうよう、キヤー、などという声が入り乱れ、教室は騒然となった。

そのとき、教室の引き戸が引かれ、福原先生が入ってきた。

「なにごと!？」

福原先生は、教卓に閻魔帳と呼ばれている黒い帳面を置きながら大きな声で言った。

「オケラでーす」

誰かが高い声をあげた。

「泰くんのオケラが逃げたので、みんなで捜してるんです」

(1) 春江ちゃんが立ち上がったって、先生をまっすぐに見つめながら言った。泰くんは床によつんばいになってオケラを捜している。

「おったー!」

泰くんが大きな声を上げて、腕をのばした。

「じゃあ泰くん、それをすぐにしまつて。みんなも早く席につきなさい」

みんな興奮していてざわついたままだったので、先生は叫ぶようにそう言つて、腕組みをして教室が落ちつくのを待った。(2) 先生が眉間にしわを寄せたまま、押し黙っていることに気づいた生徒たちは、椅子に座ったまま、やがてしんとしずまりかえった。

「みんながそのヤクルトの中に、オケラを入れて持ってきていることは知っています。それで楽しく遊んでいることも、知っていました」

先生は、ふうつと溜息をついて、教室を軽く見わたした。

「オケラで遊ぶの、楽しかった?」

先生は泰くんの顔を見ながら言った。

「あ、はい……。楽しかったとです」

「そう……。君たちが楽しく遊んでいることを、邪魔するつもりはないけれど、指でつまんで遊んでるそれは、なんだと思う?」

先生は、もう一度泰くんを見た。泰くんは肩をすくめてうつむいたまま、オケラは、虫です、と答えた。

「虫は、おもちゃと同じかな?」
先生は、低い声でそう言ったあと、しずまりかえった教室に、ちがうよね、と続けた。

「君たちがもしオケラだったとして、自分の家の中の土から突然引きずり出されて、なんだかよくわからない狭い場所に閉じ込められて、また突然引き出されてお腹を押されて、なんてされたらどんな気持ちになるか、一度目を閉じて想像してみてください」

私は言われた通り目を閉じて、オケラになったつもりになった。巨大な二本の太い棒のような(3)が、迫ってくる。逃げ場もないままつかまり、ぼと、とうす暗い場所に突然落とされてしまう。砂がある。壁はつるつるしていて這い上がれない。見たこともない砂の中にもぐっていくしかない。ああ、なんだか辛い。

(4) 教室中が神妙な雰囲気になった。

「さっきの泰くんのように、教室に逃がしてしまつたら、誰かに踏まれて死んでしまうかもしれません。一度死んでしまつたらもう二度と生き返れないのは、みなさんも知っていますね?」

はい、という返事がざわざわと広がった。

「オケラは、小さな、弱い虫です。ここに連れてこられただけでひどく疲れきっています。みんなにつまみ出されているうちに死んでしまうかもしれません。オケラは、本来自然の中で生きる生き物です。ここは学校です。人間の子どもたちが勉強をするところです。虫を使って遊ぶ場ではありません。これからは、オケラを学校に持ち込んで遊んではいけません。いいですね」

(5) えー、という残念そうな声に、はいという声がかぶさった。私は、机の上に置いた、デビューしたばかりのオケラ入りのヤクルトを見た。デビュー戦で敗退。以後試合できず、か。と思っただけけれど、なんとなくほっとした気もする。

「先生」

公太くんが手を上げて立ち上がった。

「学校に持ってこんかつたら、よかですか? 外でなら試合しても、よかですか?」

先生は、そうねえ、と少し考えてから、続けた。

「学校の外で君たちがどんなふう遊ぶかについては、先生には、基本的

になにも言えませんが、でも、オケラに接するときは、オケラの気持ちをいつも考えておくようにして、とお願ひしておきます」

「オケラに気持ちよって、あるとか」

「実くんと幸夫くんが、**A**と話した。しかし先生にはしつかり聞こえたらしい。」

「オケラにも、気持ちはありません。犬にも猫にも、虫にも花にも、気持ちはあるのです。言葉が使えなくても、生きているものにはみーんな、気持ちはあるんです」

「そう言い終えると、福原先生は、閻魔帳をふたたび抱えて、教室の戸をガラガラと引いた。」

「今からみんなで、その子たちを自然に返してあげにいきましょう」

ええ、今からあ？ うそお、ほんとお？ などと**B**したが、福原先生は聞く耳を持たない、といった雰囲気です。さつさと廊下に出た。先生の有無を言わさぬ雰囲気は圧倒されたように、みな大人しくオケラ入りヤクルトを握って先生に従った。

それから、それぞれがオケラを捕まえた場所まで、近い場所から順にみんなでぞろぞろついていった。校庭のすみ、空き地、庭、公園、畑、⁽⁶⁾山の中など、ぐるぐると移動して、オケラを放った。

私の番がめぐってきて、土の上に置いた私のオケラは、しばらくなが起こったかわからない、というふうには動きを止めていたが、そのうちに**C**と動きはじめ、土の間に入りこんで見えなくなった。

私の初めてのペット。なんて短い間の。オケラには、辛い思いをさせてしまっていたのかなあ。ごめんよ。そういうえば、名前もつけてあげてなかつた。

「あらあ、みなさんおそろいで。お散歩かしら？」

★サロペット姿のおハルさんだった。

「あー、おハルさんだあ。おハルさん」

あつという間におハルさんは子どもたちに囲まれてしまった。すごい、人気者なんだな。あつけに取られて、その輪の中には入れないまま、**D**してしまった。と、おハルさんと目が合った。とたんに目尻にたくさんのしわを寄せて、おハルさんがつこり笑ってくれた。なんてかわいい笑顔なんだろう、とドキドキした。

「子どもたちが学校に持ってきたオケラを、もといた場所に返すためのお

散歩なんですよ」

福原先生がそう説明すると、おハルさんは、あらあ、それは、すてきなことですねえ、と目を見開いた。瞳に太陽の光が入り、透き通った。

「ねえ、おハルさんち、また遊びにいつてよかですか？」

春江ちゃんが言うと、おハルさんはもちろん、と即答した。オレも行く、あたしも、という声が続々に起こった。私もそつとその声に参加した。おハルさんは、その声の一つひとつにうなずくようにうなずいたあと、じゃあみなさん、またね、と手を振って去っていった。

そうしてすべてのオケラを自然に返して、みんなが教室に戻ったときには、お昼が近かった。みな空になったヤクルトの容器を手を持って、なんだかはれればとした顔をしていた。突然企画された遠足のようなオケラ放出イベントに、ちよつと興奮状態になっていた。

「今日授業ができなかつた分は、こんど必ず補習授業をしますからねえ」
そんな先生のひとことで、みななは興奮は一気にさめてしまったのだつた。

(東直子『いと森の家』)

★サロペット……作業用の上つ張り、あるいはズボン。

問一

——(1)「春江ちゃん」とありますが、このときの春江ちゃんの気持ちの説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 泰くんのオケラをみんなで協力して捜していることをよいことだ
と思ひ、誇らしい気持ちになっている。

イ オケラで遊んでいたのは泰くんやほかの児童であり、自分は関係ないと思ひ、主張したい気持ちになっている。

ウ 自分を含めみんなでオケラで遊んでいたことが先生にわかつてしまったので、気まずい気持ちになっている。

エ 先生に注意されたことで、オケラで遊ぶことがよくないことだとわかつたので、謝罪したい気持ちになっている。

問二

——(2)「先生が眉間にしわを寄せたまま、押し黙っている」とありますが、どうして先生はこのような態度をとっているのですか。解答らんに行以内で答えなさい。

問三 (3) に入れるのにふさわしい漢字一字を文中から抜き出しなさい。

問四 —— (4)「教室中が神妙な雰囲気になった。」とありますが、これはどういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五 —— (5)「えー、という残念そうな声に、はいという声がかぶさった。」とありますが、ここに現れている子どもたちの気持ちを解答らんに二行以内で答えなさい。

問六 —— (6)「山」とありますが、「山」を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 海のものとも山のものともつかない
- 二 船頭多くして船山に登る
- 三 他山の石
- 四 氷山の一角
- 五 ちりも積もれば山となる

〔意味〕

ア 他人のまちがったおこないでも、自分をみがく助けになる。
イ ものごとの正体がかめず、結果がどうなるか、見当がつかない。
ウ わずかなものでも重なれば大きなものとなる。
エ さしずする人ばかりだと、ものごとがまとまらず、とんでもないことになる。
オ 多くの悪いことのうちの、ほんの一部分。

問七 A ～ D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選

び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)
ア さわざわ イ ひそひそ ウ もじもじ エ もぞもぞ

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生は児童たちがオケラで遊んでいたことを知って驚いたが、強い口調でしかるのではなく、オケラの気持ちを想像させることで、そのざんこくさを知らせようとした。

イ 先生は児童たちが虫に親しんでいることはよいことだと思つたが、オケラの扱い方には問題があるので、自然に返すことで丁寧な扱い方を教えようとした。

ウ オケラで遊ぶことを先生に禁止されたときには、残念そうな声も出たが、オケラを自然に返し終わった後は、よいことをしたという気持ちになつた。

エ 「私」は先生がオケラで遊ぶことを禁止したときには、ほっとする気持ちにもなつたのだが、オケラを自然に返すときには、放したくないという感情が起こつた。

